慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	談話(大学講義)の分析：「挿入説明」について
Sub Title	An analysis of discourse (university lectures)
Author	重松, 淳(Shigematsu, Jun)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.381(36)- 395(22)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0395

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

談話(大学講義)の分析

——「挿入説明」について——

重　松　淳

はじめに

談話の一形態である「講義」，特に大学で学生を対象に行われる「講義」(以後「大学講義」と言う）の全体的な構造を明確にしていくことは，日本語教育教材開発上の急務である。「大学講義」は「ほとんど等質と考えられる大勢の聞き手に対して，ある程度聞き手の反応を確かめながら，聞き手に理解させることを目的として，一般に書き言葉的な話し言葉を用いて一方的に語る形で行う」ものである。そのような性格から考えると「大学講義」の全体的な叙述の構造，その全体を構成する各部の構造，そのどちらに於てもある一定の特徴が見られるであろうことが予想される。そしてその特徴があきらかになれば，教材開発上おおきな助けとなるに違いない。「大学講義」を聞く為の訓練教材はこれまで，「大学講義」とはこのようなものであろうという推測に基づいて選択がなされてきた訳だが，今後は実態調査をふまえた教材開発への努力が行われるべきだと考える。そこで本稿では実際に行われた「大学講義」を文字化したものを資料として用い[1]，その各部分部分をとり出して分析することによって全体的な叙述構造解明への糸口をさぐり，教材開発への一助としたいと思う。

一，「挿入説明」のパターン分類

〔1〕「挿入説明」とは

さてここで問題にするのは，「大学講義」というテキストを構成する各部分のうちの1つ，ある事柄〈甲〉をある事柄〈乙〉が「説明」している部分である。先に述べた「大学講義」の性格から推して，ある事柄に関して

説明を加える部分はかなり多いとも予想されるが，今回注目したのはその頻度ではなく，「説明しよう」という意図をもって語られた部分の持つ表現上の規則性である。「説明」というのは非常に漠然とした言い方で，極端なことを言えば「大学講義」というものは全体が1つの「説明」だという言い方もできる訳だが，ここでいう「説明」とは，ある提起された事柄（あるいは提起しようとする事柄――後述）について聞き手の理解を助ける為に「挿入部分」としてさしはさまれた部分を指し，それを「挿入説明」と呼ぶことにする。たとえば次の様である。

(1) いわば近代的な感覚〈甲〉と言いますか，我々の時代の文学にも通じる感覚というもの〈乙〉が……

ここでは，講義者は〈甲〉を提起した後，更にそれについて言葉を変えて挿入的に〈乙〉を述べている。これがもし仮に

(1)―1 我々の時代の文学にも通じる（感覚である）近代感覚というものが……

であった場合，つまり修飾成分として「説明」を1つの文型の中に塗り込めている場合は，これを含めない。というのは「大学講義」があくまでも「語られたもの」であることを重視して，最初から計画的に文型に組み込まれている部分ではなく，時に応じ場合に応じて挿し挟まれる「説明」の部分に注目したいからである。従って

(2) 16世紀の終わりぐらい〈甲〉に，ま，豊臣秀吉だとかあの人達が活躍した時代〈乙〉のことですけれども……

のような例でも，これが

(2)―1 16世紀の終わりぐらいというのは，豊臣秀吉だとかあの人達が活躍した時代のことです。

といった説明であれば，今回の「説明」の例とは考えない。以上の様な基準で，文字化した資料からサンプルを抽出し，分析・分類した結果を例と共に次に示し，その分類を可能にしている規則性を論じたいと思う。

〔2〕「挿入説明」のパターンの例示

まず，この挿入的な「説明」つまり「乙は甲を説明している」という場

合の〈甲〉と〈乙〉の関係について考えてみると，両者は同一の対象を表わしており，所謂照応関係にある[2)]。たとえば

(3)　ラフカディオ・ハーン＜甲＞，すなわち小泉八雲＜乙＞という人……

という場合，講義者は〈甲〉だけでは理解を得るのに不十分であると考えて〈乙〉を挿入的に加えた訳で，〈乙〉は〈甲〉を「説明」しており，〈甲〉と〈乙〉は同一の対象を表している。しかしもう一歩ふみこんでみると，こ「説明」のあり方は，

(3)—1　ラフカディオ・ハーン，すなわちあの小泉八雲という人……

というのに等しく，「指示語」の機能になぞらえて言えば，所謂現場指示に当たるものと考えられる。それに対して

(4)　求婚〈甲〉，つまり結婚の求め〈乙〉

と言った場合，やはり〈乙〉は〈甲〉をわかりやすく「説明」したものであり，同一の対象である「求婚」という概念を表わしているが，講義者の表現意図から言えばこれは

(4)—1　求婚，その求婚とは結婚の求めのことである。

ということであって，「あの結婚の求めというもの」のように特定的に「求婚」の概念を暗示しようとした訳ではない。この関係は所謂文脈指示になぞらえられる関係であり，提起した〈甲〉を語彙的な置き換えの手段や表現形式の変換その他によって，文脈内的に「説明」したものである。以上のことからまずここで(3)に類するものをⅠとし，(4)に類するものをⅡとして二分し，先にⅠについて更に細かく検討したい。

〔3〕Ⅰのパターン

先に挙げた(3)は，偶々講義者が〈甲〉を先に持ち出した為に〈乙〉が「説明」の役を引き受けているが，実はこの〈甲〉と〈乙〉は等価で，入れ替えのきく性格のものである。つまりどちらを先に持ち出しても残りの一方が「説明」に回ることができる。今この関係を〈甲＝乙〉で示すことにする。しかし

(5)　常陸の国〈甲〉，茨城県〈乙〉

となるともはや〈甲〉は〈乙〉と等価とは言えない。講義者が話題にしているものは〈甲〉であり，〈乙〉はあくまでも付随説明であって〈甲〉と入れ換わることはできない。このようなパターンは規模が大きくなると

(6) かぐや姫〈甲〉，竹の中から生まれた少さな子供が成長する，そして人間の男たちの求婚つまり結婚の求めをふりきって月へ昇っていくというあの話〈乙〉

のように詳細な「説明」になる訳である。今これを〈甲（乙)〉のように表わす。

次に

(7) 漢字だけを用いて作られた中国のスタイルをまねた詩〈乙〉，ということですね。今日ではこれを普通漢詩〈甲〉というふうに言う。

(8) 愛情を中心としま消費生活の単位としてみられる家族〈乙〉，いわゆるファミリー〈甲〉ですけれども……

のような例では，上に符号を付したように，挿入された部分が実は被説明部分に当たっていて，講義者としては〈甲〉を出すために予め〈乙〉を提示しておいた，言葉を変えて言えばいきなり＜甲＞を持ち出して聞き手にショックを与えないようにという講義者の配慮が働いていると言える。提起しようとする事柄について先に説明する形である。これに類するものを今〈(乙）甲〉で表す。

こうしてみるとＩには〈甲＝乙〉〈甲（乙)〉〈(乙）甲〉という３つのパターンが考えられるわけで，「説明」を加えようとする講義者のその時々の心理状態によって，どれかが選ばれる訳である。

〔４〕Ｉのパターンの例

〈甲＝乙〉

(9) ジャヴィエル〈甲〉，ザビエル〈乙〉

(10) おとぎ衆〈甲〉，あるいは別の言い方をすればお話の衆〈$乙_1$〉とかどうぼう衆〈$乙_2$〉

(11) 温情主義〈甲〉，パターナリズムと呼ばれるもの〈乙〉

(12) 新興宗数〈甲〉，あるいは新宗教と呼ばれるもの〈乙〉

このパターンでは〈甲〉と〈乙〉は右のような「語」のレベルでの小規模なものしか見られず，これ以上の規模になると必ず従属関係が認められる。たとえば

(13) 3世代が同居する直系家族〈甲〉，つまり日本の伝統的な家族形態である家〈乙〉

の場合，〈乙〉は〈甲が指しているものと同一のものを別の視点から述べたものである。これは講義者が聞き手に視点の変換を促するために〈乙〉を加えたという点で，〈乙〉は〈甲〉に従属すると言える。次の例も同じである。

(14) 万葉集が作られていった時代〈甲〉，つまり万葉集の中の歌が文字に記されていった時代〈乙〉

〈甲（乙）〉

(15) 短歌の形式〈甲〉，31の音の形式〈乙〉ですね，

(16) 当時の都ですね，ま，京都〈乙〉ですけれども……

(17) 徳川家康〈甲〉，あの江戸時代の一番もとをつくりました徳川家康〈乙〉ですけれども……

(18) 茶道〈甲$_1$〉という，茶の湯〈甲$_2$〉というのですけれども，日本のあの独特なお茶の飲み方〈乙〉といいますか……

(19) 彼に恨みが数々ござるといって，その白拍子というダンサーが，にっくき男を弾劾する〈甲〉，すなわち恨みを返すような目をして蛇の鱗のような装束，すなわち衣装を着て，彼の上で目を釣り上げてにらむしぐさをして〈乙〉，芝居が終るんですが，……

(20) 梁塵秘抄〈甲〉，日本の民衆がかつて歌った歌を集めた有名な日本の古典〈乙〉がありますが……

また＜乙＞が例示という形になる場合もある。たとえば

(21) 散文の文芸〈甲〉ですね，物語とかあるいは随筆とか〈乙〉

(22) 子供達〈甲〉，幼稚園，小学生，せいぜい小学生の前半分の人たち〈乙〉

(23) 家族の生活の内面〈甲〉，つまり人々の持っている家族観，あるいは家族のイデオロギーといった側面〈乙〉

(24) 中国の方の古い教科書で孝経〈甲〉，という，親に孝行するという，親に孝行しなくてはならない，子供というのは親があって生まれたものだからまず親に孝行しなくてはいけないと，だから怪我をしたりするなんていうことはいけないことだというような，そういう文句から始まります孝経という道徳の教科書があるんですけれども……

(24)ぐらいの規模になるともはや単なる並列では聞き手の理解に差しつかえるのではっきりした挿入のマーク[3]とともに「説明」が施される。たとえば次の様である。

(25) 日本の特徴の三番目として家の経済的な基礎として，家は家産，これは家の財産，を持ち，それに基づいて家業，家の生業を経営し，家計をともにする。こういう特徴を持つ〈甲〉というふうに言われております。つまり，この3番目の特徴の言っている意味は，家が家産の管理主体であり，家業の経営主体なんだと，つまり個人個人の財産とか，個人個人の職業というようなものよりも，家という一つの法人格が，家産の管理の主体であり，家業の経営主体として存在していた。このことが家という社会関係のもう1つの大きな特徴だということなのであります。〈乙〉

つまり〰〰のような挿入のマークに囲まれた部分が〈乙〉であり，〈甲〉の示す概念はすなわち〈乙〉と照応し，〈乙〉によって詳細に「説明」されている。

〈(乙) 甲〉

(26) 日本人の家族観の中核となっている伝統的な家族〈乙〉，つまりこれは日本では家と呼ばれているもの〈甲〉でありますが……

(27) 西洋の方ですとニュースクリプトという手書きで，手でもって写した本〈乙〉，写本〈甲〉と言いますけれども……

この場合も〈乙〉が例示という形をとる場合がある。たとえば

(28) 竹取物語だとか，源氏物語，あるいは万葉集だとか古今和歌集，それから平家物語とか太平記といったようなもの〈乙〉，そういった文

芸に関わります作品〈甲〉が……

〔5〕IIのパターン

IIがIと異なる点は，〈乙〉が〈甲〉そのものを指すところである。先にも述べたが例えば

(29) 終身〈甲〉，つまり一生涯死ぬまで〈乙〉……

の〈乙〉は，〈甲〉が表わす概念そのものに加えられた「説明」ではなく，〈甲〉自身が〈乙〉であることを示すに過ぎない。しかし細かく観察してみるとやはり3つのパターンが抽出できる。まず〈甲≒乙〉とでも表わすべきもの，たとえば

(30) より所〈甲〉といいますか，根拠〈乙〉というもの

のように和語漢語の入れ替えによったものや

(31) わんころ〈甲〉，つまり小さな犬〈乙〉

(32) 少年〈甲〉ですね，子供〈乙〉，男の子〈乙〉

のように類義・同義，上・下位の関係などを用いたものがある。これはもし〈甲〉〈乙〉を逆にしたとしてもほとんど支障をきたさないもので，講義者の意図も繰り返しに等しいものであろう。

またたとえば

(33) 長男子〈甲〉，つまり男の子で一番最初に生まれた子供〈乙〉

(34) 一番初めの句〈乙〉，起句〈甲〉

の2つの例でわかるように，あたかも指示語の機能に見られる前・後照応にも似た照応のし方がある。これらを〈甲（乙）〉〈（乙）甲〉のように示しておく。

〔6〕IIのパターンの例

＜甲≒乙＞

漢語と和語の入れ替えを利用したもの

(35) 成仏できずに，つまり仏になれず〈乙〉

(36) 死者が〈甲〉，死んだ人が〈乙〉，

(37) 変化した面〈甲〉，変わってきた面〈乙〉，

(38) 1つの契機〈甲〉になりましたのは，きっかけ〈乙〉になりました

のは，

(39) 国宝〈甲〉になっている，国の宝になっている類義語や類似した表現などを利用したもの

(40) 労苦〈甲〉，苦労〈$乙_1$〉というか困苦〈$乙_2$〉というもの

(41) どんな風に読まれたか〈甲〉，どういうような形で読まれていたか〈乙〉，

(42) 逆に彫る〈甲〉と言いますか，裏返しに彫る〈乙〉

(43) 非常にきれいで〈甲〉，絶世の美女で〈乙〉

(44) 私の個人的な感想〈甲〉といいますか，意見〈乙〉というようなこと

(45) 戯曲・劇の台本〈甲〉といいますか，演劇のための本〈乙〉

(46) 天子様〈甲〉，つまり君主の象徴〈乙〉，もしくは王〈乙〉
少し規模の大きい入れ替えも見られる

(47) 日本人の色々な生活の感覚あるいは物の感じ方〈甲〉，今の日本人のごく普通の人々がどういうことを感じたり見たりしているのか。〈乙〉

(48) 世帯を構成する親族が単純化する〈甲〉，あるいは言葉を変えて言えば，第一次親族のみで構成される世帯が増加してくる〈乙〉んだという事実

但し(48)のような例は，言い方を換えることによって次に来る話題への転換がはかられる場合が多く，その意味では〈甲〉〈乙〉が入れ替え可能だとは言い切れない。たとえば

(49) 家族あるいは家は，家族個々人の立場よりも家族集団の論理を優先させる〈甲〉，あるいは家の成員個々人は，自分たち個人個人の立場よりも家全体の論理を常に優先させるという行動様式をとる〈$乙_1$〉，あるいはそうした行動様式を強制するものとして家族が存在している〈$乙_2$〉。

のようになると，〈甲〉の「家族の行動」から〈$乙_2$〉では「家の存在理由」へと視点が移っており，〈甲〉〈$乙_1$〉〈$乙_2$〉を順不動にしては一定の効果は

得られないであろう。

＜甲（乙）＞

(50) 番兵役〈甲〉，つまり王様を守る下兵の役〈乙〉

(51) 童話〈甲〉，児童の話〈$乙_1$〉，つまりは子供向きの話〈$乙_2$〉

(52) 平定する為〈甲〉，その謀反を鎮めるために〈乙〉

(53) 文正草子〈甲〉というのがありまして，文正というのは文字の文という字に正は正しいという字ですね。正義感とか。その正しいという字の正という字を「しょう」という風に読みまして，文正草子という〈乙〉のがあります。

(54) 後陽成天皇〈甲〉という，後というのは，あと，後ろという字，それから陽というのは空に輝きますあの太陽の陽という字額すね。それから成というのは成功する成るという，成という字ですけれども〈乙〉，その後陽成天皇というその天皇に……

〈（乙）甲〉

(55) 音の種類をそろえる〈乙〉，つまり難しい言い方をすれば韻を踏む〈甲〉

(56) 仏を守る者たち〈乙〉，いわば，え，番兵役〈甲〉

(57) 俳句をつくる専門家〈乙〉，俳人〈甲〉

(58) 歌をつくる専門家〈乙〉，歌人〈甲〉

(59) 決まった形式の詩〈乙〉，難しく言えば定型詩〈甲〉

以上例示してきた「挿入説明」のパターンをまとめてみると

- 現場指示型〔I〕
  - ① 甲＝乙
  - ② 甲（乙）
  - ③（乙）甲
- 文脈指示型〔II〕
  - ④ 甲≒乙
  - ⑤ 甲（乙）
  - ⑥（乙）甲

のようになる。①～③はある一つの事柄を〈甲〉と〈乙〉の表現で述べて

いることになるが，そのうち②と③はいずれも〈乙〉が〈甲〉に従属する関係にある。また④～⑥は結局言葉の説明にすぎず，〈乙〉は常に〈甲〉にしか関らない。但しこれらは必ず別々に並列的に現れるのではなく，あるものが他のものを含みまた別のものがそれを含むという現れ方をしたり，あるものとあるものが互いにかみ合うといった複雑な現れ方をしたりする。前者はたとえば(4)と(6)の関係の如くであり，後者は(18)に於ける〈甲$_1$〉〈甲$_2$〉が実は〈甲〉〈乙〉の関係にある，というが如きである。

三、「挿入説明」の表現形式

次にこれらのパターンに於ける表現形式を見てみると，先に挙げた全59例の範囲内では以下のような形が観察される。

現場指示型Ⅰ　　《　》内のことばはない場合もある。

① 〈甲〉，〈乙〉　(9)

〈甲〉すなわち〈乙〉　(3)

〈甲〉あるいは別の言い方をすれば〈乙〉　(10)

〈甲〉《あるいは》〈乙〉と呼ばれるもの　(11)，(12)

② 〈甲〉（〈乙〉）　(5)，(6)，(20)

〈甲〉〈ですね〉（〈乙〉〈とか〉〈乙〉〈とか〉）　(21)，(22)

〈甲〉（つまり〈乙〉）　(13)，(14)

〈甲〉（つまり〈乙〉，〈乙〉）　(23)

〈甲〉（すなわち〈乙〉）　(19)

〈甲〉《ま》〈乙〉ですね／ですけれども）　(2)，(15)，(16)，(17)，(24)

〈甲〉という（〈乙〉と言いますか）　(18)

いわば〈甲〉といいますか（〈乙〉というもの）　(1)

〈甲〉（つまり〈乙〉ということ）　(25)

③ （〈乙〉《ですね》）〈甲〉と言う　(7)，(27)

（〈乙〉）いわゆる〈甲〉ですけれども　(8)

（〈乙〉）つまりこれは〈甲〉であります　(26)

（〈乙〉）とか〈乙〉とか…といったようなもの）そういった〈甲〉(28)

文脈指示型II

④ 〈甲〉,〈乙〉 (36), (37), (38), (39), (41), (43), (47)

〈甲〉つまり〈乙〉 (4), (29), (31), (35), (45), (46)

〈甲〉ですね,〈乙〉 (32)

〈甲〉と言いますか〈乙〉《というもの》 (30), (42), (44), (45)

〈甲〉,〈乙$_1$〉というか〈乙$_2$〉 (40)

〈甲〉あるいは《言葉をかりて言えば》〈乙〉 (48), (49)

⑤ 〈甲〉(〈乙〉) (34), (51), (52), (53), (54)

〈甲〉(つまり〈乙〉) (33), (50), (51)

(6) (〈乙〉)〈甲〉 (57), (58)

(〈乙〉)いわば〈甲〉 (56)

(〈乙〉)つまり難しい言い方をすれば〈甲〉 (55), (59)

以上から「挿入説明」によく使われる表現形式がある程度察せられる。〈甲〉と〈乙〉の内容の同一性を，このような表現形式も一部保証しているわけである。「大学講義」を聞く留学生たちの立場から見て，「挿入説明」にこのような形式が多いことを知っていることは決して無駄ではなく，少なくとも〈甲〉〈乙〉をひとまとまりの部分として聞きとる為の一つの助けとなるであろう。しかし各パターンの例を見てわかることは，語彙上の知識とパラフレーズの技術についての知識が是非とも必要だということである。

四、「挿入説明」の全体に於ける位置

最後に，以上見て来た「挿入説明」のパターンとその表現形式が，「大学講義」全体の上に実際どのような形で現われてくるかを，実例によって検討したい。(但しテキスト全体をここで挙げることは不可能なので，その一部分を例示するにとどめる)

例示のその(1)

A従来社会学では，こうした核家族化や夫婦家族化への変動というものを，一番目，世帯構成員数の減少という事実をもって確認するという作業をやっております。

B_1　これはですね，世帯あたり何人の人が暮らしていたか，その平均の人数の変化を調べるものであります

B_2　たとえば昭和35年には日本の世帯構成員数の平均値は4.54人，10年後の昭和45年には3.69人，昭和50年では3.46人，昭和55年では3.27人というように，20年間に4.54人から3.27人まで減少してきている訳であります。

B_3　この世帯構成員の数は，言うまでもなく夫婦と子供１人とあと0.27人ということですので，単純再生産率を下回ると，つまりこのままの世帯構成員数が続けば，日本の人口はやがて減少するといった数にまで減ってきている訳であります。

B_4　こうした3.27人のような少ない家族で構成される世帯というものを考えてみますと，この世帯はおそらく夫婦と子供のみでできている家族であろうということが推測される訳であります。

B_5　このことをもって日本の家族が核家族化したんだ，夫婦家族化したんだという証拠として，提示されている訳であります。

これは大規模な「挿入説明」の１例である。Aは〈甲〉に，Bは〈乙〉に当たる。つまり，Aで述べた「作業」をBで説明するが，B_1 B_2 B_3 で具体的な数値を挙げ，その数値から導びかれる推測をB_4で示し，B_5で結論づけてしめくくり，B全体がAのかみくだいた説明になっている。これは講義者が「社会学で行なう，核家族化したという事実の確認作業」というものの実際の工程を，現場指示型Ｉの〈甲（乙）〉のパターンで聞き手に「説明」したものだと言えよう。又その〈乙〉中には小規模な〈甲＝乙〉パターンが含まれている。B_3の「単純再生産率を下回る〈甲〉と，つまりこのままの世帯構成員数が続けば，日本の人口はやがて減少するといった数〈乙〉にまで」がそれである。このような重層的なパターンの組み合わせで「挿入説明」が行われていく訳である。

例示その(2)

A日本の美術というものを考えていくとき，美術の歴史〈$甲_1$〉と言いますか日本の美術，古い時代から現代に至るまでの美術〈$乙_1$〉ですけ

れども[4)]

B 大体日本の文化そのものが多く〈甲$_2$〉，今日に至るまで多くは〈乙$_2$〉ですね，外国との関わり〈甲$_3$〉，簡単に言えば外国との影響とか，外国と接して〈乙$_3$〉，そこから多くのものを学びながら，そして日本的なものにしていく〈甲$_4$〉，日本独特のものにしていく〈乙$_4$〉ということが行なわれていると思うんです。

C 現在皆さんがいらしている，この日本〈甲$_5$〉といいますか，東京の生活〈乙$_5$〉をご覧になれば，かつて日本に来る以前に，日本のことをいろいろ聞かれたり，読まれたりするのとどんなに違っているか，想像どおりだったか，いろいろあると思いますけれども，かなり西洋的な生活というものが日常的になっていると思いますが，

D こういうふうにしてですね，日本の文化というのは，外国の文化に融合するか〈甲$_6$〉あるいは外国の文化といかに相兼ね備えていくというか，両方を一諸に，こう併用していく〈乙$_6$〉といいますか，そういうことが非常に最近になってではなくて〈甲$_7$〉古い，長い時間かかって〈乙$_7$〉，こういうふうな考え方，あるいは生活のしかたというのが育ってきたようです。

E それは日本の歴史のことを少し勉強されればわかるように，日本の古い時代〈甲$_8$〉，つまり7世紀ぐらいの〈乙$_8$〉，そういう時代の歴史など，文化を考えると，当然そこにはですね，中国，中国の文化を輸入して，そういう中国文化を学んで，そういう学んだ成果として，それを日本的なものにする。しかし決して全く中国の文化そのものをコピーするというのではなくてですね，当然それをどういうふうにうけとめて〈甲$_9$〉，自分の日本的な精神によって受けとめて〈乙$_9$〉いるというようなことになっているんだと思います。

F 美術もそういう意味で，一つのその中に日本的なものを見る場合，外国的なものと日本的なもの，そういうものをどういうふうにして消化しながら，独特の日本独特の美術にしていったかということを辿ることができる訳です。

ここの部分では次のように論が進められている。

A' 話題の提出（日本の美術の歴史を考える）

B' 問題の提起（これまでの多くの日本文化は外国文化をとり入れて独自なものにしていく文化だった）

C' 例示（現在の西洋化した日常）

D' 問題の発展（Bは長い時間をかけて育てられてきたものだ）

E' 例示（7世紀に於ける中国文化輸入とその日本化）

F' 提出した話題と関連づけた，テーマへの導入(文化の一つの表現である美術の歴史も，外国文化の日本化という観点によって辿ることができる)

傍線を付した「挿入説明」のうち，Bの〈甲$_{2-4}$〉〈乙$_{2-4}$〉を見てみると，それぞれの〈甲〉〈乙〉をまとめていけば結局このBの部分はB'になるという関係になっている。このB'はこのテキストの中の重要なテーマF'を引き出すのに欠かせない布石であることから考えると，講義者のこの部分への特別な配慮がこのような「挿入説明」となって現われているとも考えられる。講義者自身の表現意図が確実にいつもそうであるとは言えないが，ともかく「挿入説明」は例示(1)のように重層的にも例示(2)のように並列的にも現われて，聞き手への情報の定着に一役買っていると言えるであろう。

終わりに

以上分析分類してきたように「挿入説明」の全体に対する役割はいささか明らかになったが，それでは聞く側はいったいどのようにこれを利用するのだろうか。聞き手は講義者の述べることの全てを記憶したりメモしたりする訳ではないから，当然情報の取捨選択をしているはずである。この情報選択の際に「挿入説明」の部分は聞き手の各々によって取捨される。つまりあるものは情報を確実に記憶するために使われ，あるものは聞き捨てられる。しかしそれも「挿入説明」であることが直感的にわかるからできるのであって，前にも述べたように，語彙の知識が不足していたり，パラフレーズの十分にできない留学生の聞き手の場合は，そのような振り分

けが自由にできるとは限らない。その意味で各パターン毎の練習というものが，今後「大学講義」をきくための留学生の訓練教材としてとりあげられていくべきだと私は考えるのである。

注

1) 社会科学関係の六人の教授に，各々約20分ずつ，のべ10本の講義を依頼し，録音したものを，文字化した資料。

2) 田中望「コソアをめぐる諸問題」(国立国語研究所「日本語の指示詞」)「照応とは，一般の文の中の，あるいは一貫性のある文連続の中の二つの言語形式が同一の対象を指示している場合その二つの言語形式の関係を意味する」に従う。

3) 筆者はかつて「テクストの結束性」を論じた池上嘉彦「テクストとテクストの構造（国立国語研究所「談話の教育と研究Ⅰ」）を拠り所に，「大学講義」の文脈にさし挟まれる「挿入部分」の結束性を示すマークについて検討した。そして「挿入部分」が「挿入部分」として明らかに機能するためには，ある一つの語やテーマが「挿入部分」の始めや最後で（特に最後で）くりかえされるという検討結果を得た。ここでマークと言ったのは(25)に「特徴」という語がそのマークとなって「挿入部分」の最初と最後に表れていることを指している。(「大学講義のスタイル分析——大学講義を聞くことを目的とした聴解用テキストの作製のために——」日本語と日本語教育第16号)

4) 「大学講義」はあくまでも語られたものであるから，音声で表現された一つの文は，書かれた文章によく現れる形式的整合性をもつ文とは，自ら異なっている。

参考文献

「日本語の指示詞」　田中望，正保勇（国立国語研究所）
「談話の研究と教育Ⅰ」　池上嘉彦他（国立国語研究所）
「くりかえしの文法」　牧野成一（大修館）

この論文は，財団法人電気通信普及財団の助成金によっています。